



## もっと知ってほしい 化学物質の2つの顔

●  
小坪 遊 Yu KOTSUBO

朝日新聞東京本社科学医療部 記者



メディアの業界において、「化学物質」という表現を耳にする際は、往々にして悪いニュースという印象がある。昨年、弊紙で大きく扱われた話題でも、危険ドラッグについて「麻薬や覚醒剤に構造が似た、興奮や幻覚などを引き起こす化学物質」という説明がされていたし、中国・天津の倉庫爆発火災では「危険化学物質倉庫」という表現もあった。

科学分野の話題では、昨年のノーベル賞で、医学生理学賞に輝いた大村智さんの功績で「無数の微生物が作るさまざまな化学物質から、薬になるものを探す」とあって、これはよかった。一方、同賞の翌々日にあった化学賞では、対象となったDNA修復の説明に、DNAが「紫外線やたばこに含まれる化学物質などさまざまな刺激で絶えず傷ついている」と書かれていた。

「化学物質過敏症」などのからみもあって、化学物質という表現にはネガティブなイメージが付きまとう。だが、我々の生活で触れるレベルの物質に、およそ化学物質でないものは存在しない。天然成分だって、化学式で表せる立派な化学物質だ。また、生命を維持するのに欠かせない水や塩だって摂りすぎればリスクがある。過ぎたるはなお及ばざるがごとしで、同じ化学物質でも使い方や状況で、毒にも薬にもなったりする。

こうした、両面性は、科学的な性質だけではなく、社会的なインパクトという意味においてもそうである。

私は昨年5月まで福島にいた。そこではヨウ素、セシウム、ストロンチウムといえば、連想するのは東京電力福島第一原発事故のこと。これらの元素は憎しみや悲しみ、恐怖の対象だった。しかし、これらの元素は別の場面で、日本が誇る技術の根幹を支えている。それは、日本が世界をリードし続ける超精密原子時計の世界である。これらの元素はその時計の心臓部である「振り子」として使われているのだ。

幸運にして福島と原子時計、その両方の取材に関わった身として、化学物質の持つ2つの顔は私の中に強く刻み込まれている。

化学物質は使い方によって、有害にも有益にもなり得る。社会に不安も与えるし、人々に希望ももたらす。だが、難しく考える必要はない。石鹼の成分は体をきれいにしてくれるが、眼に入れば、しみて痛くなる。我々は赤ちゃんの頃から、そうやって化学物質の持つ2つの顔と向き合ってきたはずだ。いまさら当たり前のことと感じるかもしれない。だが、身近なところから、たくさんの人に知ってもらうことで、化学への理解はきっと進むはずだ。そのための啓発がメディア、そして化学界にも求められている。

© 2016 The Chemical Society of Japan